

提

言

自分の力と周りの手

NPO 法人ダイバーシティ工房 ^{やがみ}八神 ^{あい}愛衣

家もない、お金もない、家族は崩壊、頼れる先のない私を救ってくれた場所は、小さな個人塾。そんな安心できる場所を増やしたい。

唯一の居場所だった自在塾との出会い

受験が迫る中学3年生の1月。千葉県の母子寮にやってきた。進学先を探していたとき、母子寮のスタッフから自在塾（NPO法人ダイバーシティ工房の前身）を紹介された。

家と呼べないほど狭いワンルーム。勉強できる場所どころか、寝る場所さえない部屋に母と弟と3人でいることが苦痛だった。私は、学校が終わると家へは帰らず、すぐ塾に向かった。勉強をしたかったのもあるが、ただただ家に帰るのが辛かった。

自在塾の先生は私を一生懸命応援してくれた。家に帰っていないことが分かれると毎晩おにぎりを作り、塾の一室を貸してくれ、寒いと暖房もつけてくれた。更に授業料も払える価格に下げってくれ、ボランティア講師の授業も受けさせてくれた。塾は今までに感じたことのない温かさを感じられる場所だった。

頑張った甲斐あって無事公立高校に合格した。塾では合格祝いですき焼きパーティーを開いてくれた。とても嬉しかった。

高校生活は順調に迎えられた。私は派手で校則を守らない生徒だったが、文化祭や体育祭は張り切って参加していた。自在塾に通っていたため、成績も悪くはなかった。

高校中退

高校2年生になり、アルバイトを始めた。それをきっかけに家には帰らず、塾にも行かず、夜遊びを覚えた。学校は寝る場所になり、成績も落ちて、頻繁に欠席するようになった。その時はその生活が楽しかったが、それも束の間、担任の先生からこのまま休みが続くと進級ができなくなることを聞かされた。ショックだった。すぐにアルバイトを辞めて学校に戻る決意をした。

それからは遅刻もせず授業もしっかり受けていた。そんなある日、学校からの手紙がきた。5か月分の学費滞納の知らせだった。母には支払ってもらえず、アルバイトで貯めたお金が少しあったので自分で支払いをした。当時の私にとっては高額だった。同時に「なんでお金を自分で払ってまで学校に行かなければいけないの。」という思いが生まれた。それでも学校には行った。

不満がたまってきた。今思えば、とても“些細こと”で先生と言い争いになった。我慢できなくなってしまい、突発的に「学校辞める。」と言ってしまった。先生も止めなかった。

塾に戻っておいで

高校を辞めて3日。行くあてもなく、やることもない。そんなときに思い出した。

「あ、自在塾に行こう。」

塾で今までの出来事と不安を話した。今後はどうするかを聞かれ、わからないとしか言いようがなかった。すると、先生が「う

ちで働く？」と声をかけてくれた。

受験の時に毎日塾に通って来る姿を見て、私は頑張れる子だと思ってくれたそうだ。

しばらくして自在塾はNPO 法人となり、当時の塾の先生は代表になっていた。その時、私は高校も卒業しないまま社会に出ることに不安を感じた。でも、通い慣れた大好きな場所で働くことにわくわくした。

高校卒業を目指しながら塾で働く

働けることになって、「高校も卒業してないのにやっぱり人に勉強は教えられない。」と、高校卒業資格を取る決意をした。

代表から転校手続きができるか問い合わせるようアドバイスをもらって、翌日学校に連絡を入れたが、もう間に合わなかった。自分で決めたことではあるが、高校を辞めるにあたって中退以外にほかの選択肢があることを私は知らなかった。高校中退したら高卒認定を取るか、働くかしかないと考えていた。

結局、自在塾からの紹介で通信制高校に通うことになった。仕事をしながら高校のレポートを期限までに提出するのは大変だったのを覚えている。

講師の仕事

実際に働いてみると、社会は甘くなかった。ここは塾、子供好きな私は子供たちと触れ合えることを楽しみにしていた。しかし、なかなか子供と接する仕事はもらえなかった。また、仕事内容も簡単なものが多く、未経験だからと我慢していたが、苦しかった。

講師として授業を担当するようになってからは、自分の授業がどうやったら楽しくなるか、どうしたら子供が理解しやすくなるか考えることにやりがいを感じた。子供と一緒に成長していける自分がとても好きになった。

無料学習教室を作りたい

20 歳を迎えたある日、今後の人生、自分は何をしたいのかと考えた。自分の人生を振り返ってみると、私は運が良かった。家庭環境は最悪でも周りに支えられていたし、学習面では自在塾が応援してくれた。自分のような子供たちにチャンスを繋げたいと思った。

代表に相談したところ、代表も数年前に母子寮の子供たちに無料学習教室を不定期で開催していたことを話してくれた。

しばらくして代表から、一緒に食事付きの学習支援事業をやらないかと誘いを受け、無料の学習教室を実現させた。現在も運営を続けている。高校受験生はもちろん、高校中退生や高校をやり直したい人たちも学びに来ている。

おわりに

高校を辞める前の面談で主任の先生がおっしゃった言葉は今でも忘れられない。

「昔のお前と今のお前とは全然違う。自分が一番わかってるな。」

痛いほど分かった。そして、この1 年半私のことを見てくださる先生がいたことが嬉しかった。本当は後悔した。でも後戻りはできなかった。その言葉はいろいろな形で意味を変えて今でも私の支えになっている。

学校生活における「問題児」は子供だけの問題ではない。子供は知っているようで知らないことが多く、親身になって考えてくれる大人の存在が必要だ。成長の過程で子供は反抗的にもなるが、自分の人生がどうでもいい子なんていないのだ。本人が学校を中退すると決めたとしても、自分の子供のように思って、今後の生き方についての情報提供を行うことをお願いしたい。大切にしてもらうことを嫌う人はいないと私は思う。